



筑紫女学園大学リポジット

The Meaning of “Tidying Up” in Modern Society : Focusing on Life-Changing Advice of the House-Organizing “Guru” Marie Kondo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 嘉代, Hashimoto, Kayo メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/511

現代社会における「片づけ」という行為の意味

— 片づけコンサルタント・近藤麻理恵の「人生を変える」
片づけ術に注目して —

橋 本 嘉 代

The Meaning of “*Tidying Up*” in Modern Society — Focusing on Life-Changing Advice of the House-Organizing “Guru” Marie Kondo —

Kayo HASHIMOTO

1. 問題の所在

米誌『TIME』は2015年4月、The 100 Most Influential People（世界でもっとも影響力のある100人）の一人に近藤麻理恵を選出した。片づけコンサルタントという肩書きを持つ彼女の著書『人生がときめく片づけの魔法』は世界30ヵ国でシリーズ累計300万部を超えるベストセラーとなっている。近藤は、不要なものを捨て部屋を整理整頓することで人生が好転するとし、毎日コツコツではなく一気呵成に行う「祭り」としての片づけを提案する。単なるノウハウの伝達にとどまらず、持ち物や部屋と対話したり感謝の言葉をかけることなど、モノに魂が宿るとみなす考え方が特徴的だ。

本論文では、現代社会で「片づけ」のプロが職業として成立し、大きな影響力を持つに至ったことの背景と、その社会的な意味をとらえてみたい。手順としては、まず、「片づけ」に類するテーマがメディアでどのように扱われてきたかを雑誌を対象として時系列で振り返る。次に、近藤の主張とそれ以外の“カリスマ”とされる人々の主張との相違点を比較し、近藤の「片づけ」の独自性と普遍性を確認する。

物を所有することが豊かさの象徴ではなくなり、あふれる物の管理と整理が新たな課題となり始めた時期に起こった「収納」ブーム、そして、物の管理よりも「捨てること」が新たな課題となったことを象徴する「捨てる！」技術や「断捨離」ブームなど、私たちと物との向き合い方は、さまざまな変遷をたどってきた。現在に至るまでの「片づけ」ブームの歴史を振り返ることで、現代人はどのような問題に直面し、その解決策として何が提示され、規範化されてきたかを検証したい。

2. 家事にかんする先行研究の検討

現代社会における「片づけ」という行為そのものに注目がなされ、本論文の先行研究として直接位置づけることができる研究は、まだ見あたらない。ⁱ そのため、より広義の家事にかんする先行研究を検討することとする。片づけは、家庭内における女性の仕事というわけではなく、近年は『トヨタの片づけ』という本が20万部超のベストセラーになるほど、ビジネスの場面で仕事の効率化の手法として用いられる。とはいえ、女性を主な対象として発行される雑誌（以下、女性雑誌）で家事の一つとして扱われてきた歴史が長い。よって、まずは女性雑誌にかんする先行研究から見ていく。

井上+女性雑誌研究会（1989：74）が1986年の調査をもとに女性雑誌で扱われることが多いテーマを分類した「言及分野分類表」では、6つの大分類ⁱⁱ の一つの「家事」が、さらに「料理」「裁縫」「インテリア」「育児・教育」「医学・健康」「家計・家政・家事」という6つの中分類に分かれる。「片づけ」や「収納」というテーマは、この表のなかには存在しない。1980年代後半から急に浮上したテーマだからだ。強いてこの表で分類するとしたら、インテリアの中の小分類「室内用品、ハウジング」という広範囲の項目か、家計・家政・家事の中の小分類「家事（掃除、洗濯）・歳時」があてはまる。井上らは、1985年頃に女性雑誌で料理への関心が高いことを指摘しているが、それは大正6年創刊の『主婦之友』ですでに確立された伝統であり、2015年現在、発行部数が多い生活実用情報誌（『ESSE』『サンキュ！』）ⁱⁱⁱ においても、料理は相変わらず中心的なテーマである。現在は、①料理、②お金（節約・貯蓄・やりくり）、③片づけ・収納という3つのテーマをローテーションでまわす形になっている。ちなみに、1970年代までは主流だった裁縫というテーマは、既製服を買う文化の定着により、一般的な雑誌においてはみられなくなった。

次に、家事という行為の意味づけを論じる先行研究をみていく。家事ほど相反する評価がつきまってきた労働はない（竹信 2013）という指摘があるように、お金で測れない神聖なもの、創造性を発揮できる楽しい仕事、と肯定的な意味づけが行われたかと思えば、満足感が得られない単純労働、報酬が支払われない不払い労働、といった否定的な見方が示される。この相反する評価が起るメカニズムについて、上野（2009）は、家事を「労働」として経済的価値で測ろうとすると「愛」や「母性」の名の下に神聖さへと救い出そうとする試みが行われ、女性の家事育児を肯定する意識が維持・補強されるためと述べている。瀬知山（1996：73）は、家事に情緒的な意味を付与することを否定する。再生産役割（家事・育児）は自分にしかできない神聖なものではなく、他者や金銭で代替可能な「労働」と気づくべきと主張する立場だ。近藤は、他の人が決めたメソッドよりも「ときめくかどうか」という自分のマインドを判断の基準とすべきと考えているが、片づけ自体をこのように「自分にしかできないもの」と過剰に意味づけし、属人化すると、代替不可能な神聖な作業になってしまう。後述するが、2000年代に入ってから、風水やヨガ、アニミズムの思想を取り入れ、行為に情緒的な意味づけをする整理・片づけ法が好まれる傾向がみられ、この傾向は強まっている。

3. 分析方法

以下の手順で進める。

- (1) Web OYA-bunkoの記事索引検索サービスで、「収納」「片づけ」というキーワードが含まれる記事の件数や頻出の時期を調べる。
- (2) 近藤麻理恵が「片づけ」という行為に付与している意味づけがわかる事例を、著書やインタビュー記事などから抜き出し、近藤の登場以前に類似の分野で影響力を持っていた人物の主張と近藤の主張を比較分析する。それを通じ、近藤が提唱する「片づけ」の独自性と普遍性を明らかにし、日本のみならず現代の社会で彼女の提案が支持される背景を考察する。

(1)については、まず、雑誌記事索引検索データベース「Web OYA-bunko」のフリーワード検索で「収納」「片づけ (or 片付け or かたづけ)^{iv}」という文字がタイトルもしくはキーワードとして含まれる記事の索引を検索した。明治期から2015年10月18日までの記事の件数は表1のとおり、「収納」が4,351件、「片づけ」が1,963件である。近藤が好んで用いている「片づけ」という言葉は、2000年代に入ってから使われる機会が増えたが、それ以前は「収納」のほうが主流であった時期が長いので、「収納」「片づけ」の両方を用いた。次に、それぞれの用語について、同データベースに収録されている記事の初出の時期と件数の急増期を調べた。もっとも古い記事は、「片づけ」が1966年、「収納」が1975年である（表1）。

(2)については、近藤の著書2冊（『人生がときめく片づけの魔法』『人生がときめく片づけの魔法2』）と、雑誌やWEBサイトの記事をもとに事例を挙げ、辰巳渚（2000年、『捨てる！』技術』）、やましたひでこ（2009年、『断捨離』）、マーサ・スチュワート（米国のカリスマ主婦と呼ばれるライフスタイルアドバイザー）、栗原はるみ（料理研究家）といった人物に的を絞り、各人の考え方やコメントを例示しながら、相違点を明らかにする。

4. 結果と考察

(1) 片づけというテーマの成立と定着

「片づけ」という行為に関連するテーマをメディアはいつ頃からどのような形で扱ってきたか。Web OYA-bunkoの検索結果を手掛かりに、たどってみたい。

・テーマの成立時期

2015年現在、「片づけ」は、家事などの生活情報を扱う生活情報誌（料理専門誌を除く）で常に大特集とされる3大テーマのうちの一つである。『ESSE』『サンキュ!』といった月刊の生活情報誌は、年12号のうち3～5号で「片づけ」を第一特集とし、多くのボリュームを割いている。

片づけと並び、高い頻度が特集が組まれる「貯蓄・やりくり・節約」と「料理」は、古典的かつ王道的なテーマである。『主婦之友』創刊号も家計のやりくりと料理を扱っていた^vし、Web OYA-bunkoの目録検索（明治以降）で「料理」「節約」で検索すると明治初期の雑誌の記事が示さ

れる。これに対し、「片づけ」は、初出が1960年代後半の高度経済成長期で、定番のテーマといえる状態になったのは、日本経済の低迷が始まった1990年代以降である。つまり、「片づけ」は、日本社会の成熟化とともにニーズが強まった分野といえる。また、「片づけ」という言葉は、料理やお正月の飾りつけなど特定の作業の「後片付け」に意味が限定されていた時期が長く「熟慮せずに物事を判断してしまうこと（批判的なニュアンスで）」「仕事や物事をうまく処理すること」など、家事以外のさまざまな種類の記事で用いられることのほうが主流であった。現在のように「物を捨てて整理整頓する」という意味で使われる機会が増えたのは、米国のカウンセラーが書いた『片付けられない女たち』という本の訳書が日本で刊行され話題となった2000年以降である（図1参照）。

なお、同データベースで索引を採録している雑誌は、大宅壮一文庫の所蔵雑誌のごく一部に過ぎず^{vi}、キーワードの表記のゆれや入力ミスもある。表1、図1で示す件数は、あくまでも目安にすぎないことをことわっておきたい。

・「片づけ」関連テーマの質的な変遷

高度な消費社会が到来した1980年代は、モノを所有することは快楽であるという時代の雰囲気蔓延する一方で、増えすぎたモノが狭い住宅に収まらず、もてあます人も増えてきた。そこで、大切なモノをなんとか部屋に収めるために「収納」のノウハウが求められるようになった。「誇示的消費（ostentatious consumption）」の象徴といえる「見せる収納」という提案も出てきた。その後、不況が訪れたが、100円ショップのチェーン展開が進むなど、物価が下がったため、収入にかかわらず、モノを買い、増やし続けることは可能であった。つまり、収納の悩みは1990年代に入ってから続いた。そこで現れ、もてはやされるようになったのが「スキマを活用する」「カゴに入れる」「つるす」などのテクニックを駆使して狭いスペースにモノを最大限まで収めるアイデアを提案する「収納のカリスマ^{vii}」である。近藤典子はその代表格といえる。

収納ブームが続いていた2000年、モノを整理できないストレスから解放されるために、モノを捨て、シンプルに生きるべしと提案する「『捨てる！』技術」がベストセラーになった。その後、「捨てる」と「収納」の併せ技として、まず不要なものを捨て、モノを減らしたところで収納ルールを決め、すっきりと片付いた部屋にしよう、といった記事^{viii}が数多く現れるようになった。

このほか、日本ではブームというレベルには至らなかったが、25カ国で200万部売れたカレン・キングストンの“Clear Your Clutter with Feng Shui”の邦訳『ガラクタ捨てれば、自分が見える

表1 「収納」「片づけ」記事の件数と初出時期・タイトル

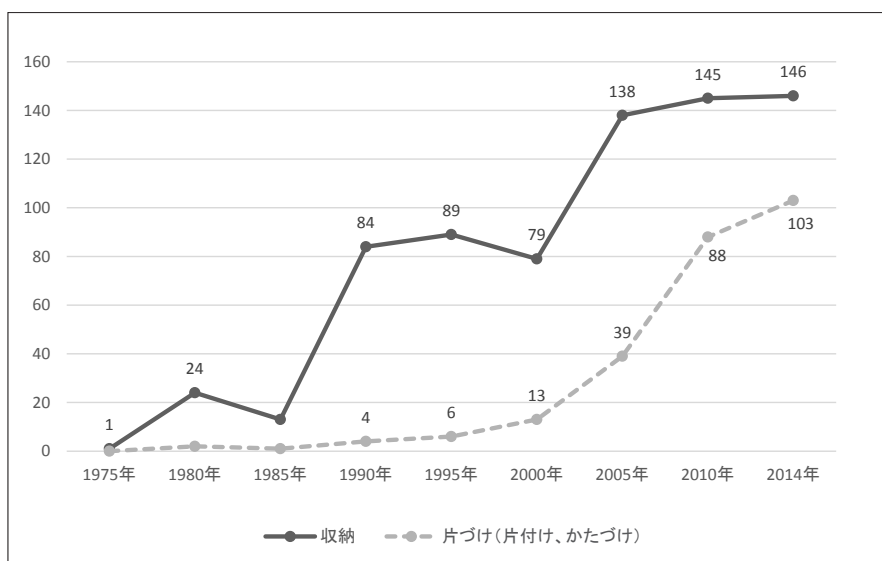
フリーワード	件数*	初出
収 納	4351件	1975年12月『新評』「部屋を機能的に 壁面収納ユニットのすすめ」
片づけ or 片付け or かたづけ	1963件	1966年11月26日号『週刊女性』「対談：片づけ上手は料理上手」

*件数は、2015年10月18日時点。発行時期により検索方法が異なるため、1987年以前の記事（目録検索）の件数と1988年以降の記事（通常検索）の件数を合計した。

表1には、税金の収納など、本論文の関心と関係ない記事も含まれる。図1ではそれらは除外した。また、1つの記事を複数の件数としてカウントしている箇所は1件とするなどの修正も図1の数値に反映済みである。

——風水整理術入門』も、2002年に刊行された。キングストーンは風水の考え方を取り入れたスペース・クリアリング法（空間浄化法）を提唱している。近藤麻理恵も自分が考える片づけの目的は「自然に則した生活をする」という点で、風水と同じであると述べている（近藤 2010）。また、2009年にやましたひでこが上梓した『新・片づけ術「断捨離」』は、ヨガの思想を取り入れている。やましたは、不要なモノが新たに入ってくることを断ち、すでにある不要なモノを捨て、それを通じて不必要な執着から離れ、心が平和になる、という考え方を提唱する。単なる片づけや収納のテクニックではなく、生き方を変えることに重きを置く点で、近藤の「片づけ」とやましたの「断捨離」、そしてキングストンの風水整理術は共通する。

図1 「収納」「片づけ」にかんする雑誌記事の年間件数の推移（1975年～2014年）



Web OYA-bunkoでの検索結果をもとに筆者作成

(2) 近藤による「片づけ」という行為への意味づけの相対化

・捨てるか否かの判断基準：辰巳渚との比較

近藤は幼稚園児の頃から主婦向け雑誌の家事や片づけ、整理整頓の記事を読み、興味を持っていたという。また、中学生のときに『捨てる！技術』（辰巳 2000）がベストセラーとなり、影響を受けたとも語っている。とはいえ、物に対する考え方や態度は、辰巳とは大きく異なる。

辰巳は物を大切にすることを「悪習」と言い切り、「見ないで捨てる」「必要か不必要かを判断せず、とにかく捨てる」ことを提唱する。一方で、近藤は、すべてのものに対し、心が「ときめくかどうか」をもとに「要る・要らない」を判断すべきとする。そして、使い古した物は、持ち主を支えるための役割をまっとうしたと解釈し、「ありがとう」と感謝し、捨てる。しかし、捨てることはその物にとっての新たな門出となると考えている。このようなアニミズムの思想¹³が見られる点は、近藤の独自性の一つであり、物を捨てる際の罪悪感や抵抗感を軽減する可能性がある。

また、近藤は何もかも捨てるのではなく「残すこと」も重視している。取捨選択の結果として残っ

たものから自分の大切なものが明確化し、人生を輝かせることができるというのが近藤の主張だ。

・宗教的意味づけと主婦役割規範：栗原はるみとの比較

ともに国際的にも注目される存在である栗原はるみと近藤が暮らしについて語っている内容で、共通するのは、日々の生活のなかに宗教的な儀式あるいは修行のような要素を盛り込んでいる点だ。

栗原は、毎朝6時に起き、仏様にお茶とお水を供え、猫の世話をし、庭に水をまいて、部屋の掃除をするという日課が一段落するまでは水を一滴も飲まないという。^x 栗原は「主婦である」というアイデンティティを強調し、主婦という生き方は素晴らしいと繰り返す^{xi}。プロの料理人でなく専業主婦歴が長い自分が料理研究家を名乗ることへの反発を防ぐという計算も含まれているのであろうが、「主婦の仕事を肯定し、元気を与えてくれる救世主」との仕事仲間の編集者の証言もある。働く女性が増えるなか、アイデンティティが揺らぐ主婦業や相反する評価がつきまとう家事に対する肯定的な意味を与え続けていることが、彼女が主婦層を中心にカリスマ的な支持を集める理由のひとつと思われる。

近藤は、清浄に保ち聖域化することで部屋はパワースポットのようになるといい、本棚の上段をマイ神棚として使うことも提案する。ノウハウではなく「ときめき」を重視し、物を必要かどうか見極める際に自己の内面と向き合うことが重要という。「過去に片をつける」という意味を重視し、「片づけ」という言葉を用いることにこだわっており、過去にブームとなった「収納」や「他人が示した基準に従うノウハウ型の片づけ」を否定する。

近藤は、自分は女性であるという意識からではなく、幼児期に片付けに対する純粋な興味を覚え、その後、大学時代に片づけコンサルタント業を始めている。20代半ばの独身のときに最初の本を書いており、彼女にとっての家族とは、そもそも自分が世話をする対象ではなかった。2014年に結婚したが、それ以後も「家族への愛」を片づけの理由にすることはない。「自分」に関心が向いており、個人志向が強い。これとは対照的に、レシピ本が欧米で出版されたり賞をとるなど、家事の分野で国際的に注目されている栗原はるみは、「自分は主婦である」という立場を主張し続けてきており、愛や母性をもとにした家事役割を肯定的に語ることが多い。「片づけコンサルタント」として世界中に影響を持つ近藤が団塊世代の栗原とは対照的に性別や家族への愛などを役割遂行の基準にしない姿勢であることは、世代や国籍、性別を超えた広い層からの支持を取りつけた一因といえるだろう。

・足し算か引き算か：マーサ・スチュワートとの比較

スチュワートは、コネチカット州の6エーカー（2万4000平方メートル）の敷地にある古い家を舞台に、^{xii} キッチン天井には「いつのまにか増えてしまった」という数十種類の鍋やかご、調理器具を吊り下げるなどし、たくさんの道具を使いこなし、洗練されたアイデアを次々と披露した。家事はつまらないものと考えられていたアメリカで、家事を「家庭内で行われる素晴らしいアート」であるという意識を長年かけて浸透させたと本人も自負^{xiii}している。2001年には年代別に建てられた9軒の家を所有し、それぞれの家の個性に合わせてインテリアを考え、自らが経営する出版社の月刊誌やテレビ番組を通じて発信し、不動の地位を築いた。日本では住宅事情もあり、シンプル

に暮らすための「捨てる」という引き算の行為が注目され始めた時期だが、アメリカのカリスマ主婦と呼ばれたスチュワートは、足し算志向のライフスタイルを提案していた。インサイダー取引疑惑で収監された後、家は4軒に減ったようだが、敷地内には馬や鶏を飼っており、ミキサーは、4リットル用から19リットル用まで、サイズ違いを3台使い分けている。オリジナル商品8500品目を67カ国で販売するなど、物を所有することで暮らしを彩るという彼女のコンセプトは不変だ^{xiv}。

近藤はモノを取捨選択するプロセスを体験することで、人生に必要なものとそうでないものはっきり見分けられるようになるという。2015年、欧米では近藤流の片づけを「Kondoする」と呼び、自分が挑戦した片づけ祭りの模様をFacebookのグループページでシェアするカルト的なファンが多数いると米紙Wall Street Journalは報じた^{xv}。アメリカでは、経済の回復により、自分の服や持ち物をチャリティに出すブームが起り、それと同時に郊外の広い家から都心に移り住み、居住スペースが小さくなった人々も増加した。Kondoの本が全米で版を重ね、人々を動かしたのは、ダウンサイジングの風潮と都心回帰による住宅事情の悪化という時代精神（zeitgeist）の反映である、と記者は論じている。近藤は、片づけコンサルタントの仕事を「毎日大量に捨てられるモノを供養する仕事」とも述べている。Wall Street Journalでは近藤に「グル」という呼称を用いている。片づけに対するスピリチュアルな意味づけが欧米人の興味をそそっているようだ。

5. 総括・インプリケーション

近藤は、モノや情報があふれ、個人の処理能力を超えつつある現代社会において、モノを所有するか否かの判断能力を失っている人々に向け、持ち物に対して「ときめく（Spark joy）」かどうかを基準にし、自分の人生を彩ってくれるモノだけに囲まれて暮らすことを提案する。モノを捨てるのが生きる目的と化したような本末転倒的なストイックな姿勢やアイテムの数を規定するような押し付けがましさと距離を置き、自分の人生の棚卸し作業を行うことを推奨している。多くのモノを持ち使いこなしながらインテリアや家事を楽しむのが豊かで洗練された暮らしであるという考え方や、そのために住宅や収納のスペースを拡張しなければならないという考え方に対しては、完全に否定し、最小限のモノの管理で済ませることをよしとする。また、世代や自らの立場の影響もあるかと思われるが、主婦だから家を整理整頓すべきといった役割規範に縛られることはなく、家事そのものに過剰な情緒的意味づけを付与しない。片づけなどはさささとすませ、それから解放されてより高次の活動に向かうのがよいというのが近藤の考え方である。これらが近藤の主張において新奇性のある部分といえる。

日本にはもともと禅や俳句など、極限までそぎ落とす美の伝統文化があった。住宅事情に恵まれていない国だが、それがケガの功名となり、物に囲まれて暮らすことが幸福であるという価値観を手放す時期が、日本人は、国際的にみて早かったのかもしれない。「捨てる」「収納する」といった試行錯誤の段階を経て洗練され、自分がときめきを感じる最小限のものだけに囲まれることが理想的だという「引き算」の美学に到達した近藤の提案は、資本主義の限界を痛感しつつある現代人に価値観の転換を迫るものとして、国境を超え、インパクトを与えることができたのだと考えられる。

<注>

- i 片づけられない心理的な症状や子どものしつけなどを扱った研究はある。
- ii 言及分野分類表の「大分類」は、おしゃれ、家事、生き方、余暇、できごと、その他。
- iii 日本雑誌協会の印刷部数公表ページの 女性 > ライフカルチャー > 生活実用情報誌 > ハウスホールド全般で、2015年4月～6月の発行部数が30万部以上ある2誌。
- iv 検索結果には「片付け」「かたづけ」表記を含むが、本文中では近藤の著書の表記と同じ「片づけ」と表記する。
- v 創刊号の記事として「お金を上手に遣ふ五つの秘訣」「手軽な経済料理法」「懸賞発表 家計の実験」などがある。
- vi Web OYA-bunko定額利用サービス利用ガイドより。
- vii 近藤典子（『LEE』2003年5月号「収納ブームの火つけ役「近藤典子」のできるまで」）など
- viii 『主婦の友』2002年11月号「この「捨てる」5大ルールで片づけ収納達人になれる!」、『女性セブン』2003年6月5日号「クローゼット片付け「こう捨てる」「こう収める」で解決!」、『レタスクラブ』2005年12月10日号「捨ててスッキリ!お片づけ」など。
- ix 本人は「アニミズムを意識したことはない」と述べている（ダ・ヴィンチニュース 新刊著者インタビュー）。
- x 『ミセス』2001年2月号『『ミセス』と12人 栗原はるみさん 主婦であることの幸せ』、『ミセス』2009年1月号「栗原はるみという生き方」ほか
- xi 「食卓は家族への愛情表現」（『婦人公論』1995年8月号）、「家族のために尽くした日々は、決して無駄にはなりません」（『ミセス』2013年4月号）などの発言がある。
- xii 『non・no』1990年9月5日号「ようこそ!! マーサのお菓子の家へ」
- xiii 『Grazia』2001年2月号「アメリカの素敵なライフスタイルはマーサ・スチュワートがお手本」
- xiv 『CASA BRUTUS』2012年10月号「全米No. 1のライフスタイルアドバイザー マーサ・スチュワートの美しい暮らし。」
- xv The Wall Street Journal, “Marie Kondo and the Cult of Tidying Up”, February, 6, 2015, (Retrieved October 15, 2015, <http://www.wsj.com/articles/marie-kondo-and-the-tidying-up-trend-1424970535>)

<文献リスト>

- 井上輝子+女性雑誌研究会, 1989, 『女性雑誌を解説する』 垣内出版
- Kingston, Karen, 1998, Clear Your Clutter with Feng Shui : Space clearing Can Change Your Life
Published by Piatkus, UK (=田村明子訳, 2002, 『ガラクタ捨てれば自分が見える——風水整理術入門』
小学館)
- 近藤麻理恵, 2010, 『人生がときめく片づけの魔法』 サンマーク出版
———, 2012, 『人生がときめく片づけの魔法2』 サンマーク出版
- OJTソリューションズ, 2014, 『トヨタの片づけ』 KADOKAWA
- 瀬知山角, 2001, 『お笑いジェンダー論』 勁草書房
- Solden,Sari, 1995, Women With Attention Deficit Disorder: Embracing Disorganization at Home and in the
Workplace (=ニキリンコ訳, 2000 『片づけられない女たち』 WAVE出版)
- 竹信三恵子, 2013, 『家事労働ハラスメント』 岩波書店
- 辰巳渚, 2000, 『捨てる!技術』 宝島社
- 上野千鶴子, [1990] 2009, 『家長父长制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』 岩波書店

やましたひでこ, 2009, 『新・片付け術「断捨離」』 マガジンハウス

<参考Webページ>

Marie Kondo , The 100 Most Influential People, TIME 100 Artists, 2015年4月16日掲載、2015年10月15日
閲覧 <http://time.com/3822899/marie-kondo-2015-time-100/>

片づけの常識をくつがえし、人生を好転させる電子書籍（新刊著者インタビュー／ダ・ヴィンチニュース）
2011年11月8日掲載、2015年10月15日閲覧 <http://ddnavi.com/interview/23119/>

『クーリエ・ジャポン』2015年10月11日掲載、日本発「魔法の片づけブームはなぜ世界に広がったか？」
<http://courrier.jp/news/archives/4478>

（はしもと かよ：英語メディア学科 講師）

